

9月も半ばを過ぎました。明日は敬老の日、教会では90歳を迎えられた鶴谷頼子姉がおられます。すでに91歳ですが、高尾操姉もお祝いいいたします。100歳の稲川はつを姉をはじめ、湯本千恵子姉、山根芳枝先生、細井敏子姉、出口きみよ姉、主の祝福が豊かにありますように。

うぬぼれてはならない

今朝の聖書の箇所は、ルカ福音書の「主イエスのエルサレムへの旅」の後半部分の中の一節です。いよいよ十字架という贖罪のクライマックスが近づく中で、信仰の核心が教えられています。うぬぼれてはならない、これが主の鋭いメッセージです。

「実るほど頭を垂れる稲穂かな」という言葉があります。「誰でも高ぶるものは低くされ、謙るものは高められる」という14節の御言葉も、同じように用いられることがあります。謙遜の美德は、多くの人の顔くところでしょう。日本では偉そうにすることを「天狗になる」と言います。鼻高々で傲慢な態度を揶揄しているのです。

けれども、実はこの教えは、単純な教訓話ではありません。謙虚な態度であればそれで良いとは言われていないのです。キーワードは「神の義」です。神の義は、救いの道、と言い換えても良いでしょう。ここに出てくるファリサイ派の人と、徴税人では、どう考えても、人の目に正しく、人望があるのは、ファリサイ人の方です。けれども、イエス様は救われたのは、徴税人のほうだった、と言われるのです。徴税人は、謙虚というより、本当に悪い人で、嫌われ者なのです。悔いても同じことを繰り返す可能性さえあるのです。一体どうして、ファリサイ人は救われないのでしょうか。

自分を映す鏡

イエス様は「神の義」、すなわち救われるためには、神の前に自分自身の小ささを認める者でなければならないと教えているのです。ファリサイ人の祈りは、注意深く聞くと、自分自身を認め、そして他人と比べていることが分かります。それは、白雪姫の王女が、鏡に向かって「世界で一番美しいのはだあれ（私でしょう）」と夜な夜な問いかけるようなものです。しかし、真実で世界を支配しておられる神は、「あなたの正しさなど如何程のものか」と退けられます。そして徴税人は、人の目には悪であっても、「罪人の私を憐んでください」と自分の小ささをはっきりと認め、神の憐れみにすがったという心ゆえに、神は彼を救われたのです。

私たちは、神様に祈ります。しかし、その祈りは救いをもたらず祈りでしょうか。チラッと神様を見て、あとは自分と他人を眺め続ける祈りに、救いは、ないのです！神様の救いは、高く、広く、深く、人間の想像を遥かに超える恵みの世界なのです。